

期待外れの後妻だったはずですが、
なぜか溺愛されています

登場人物紹介

フラヴィオ・レオーネ

一途で真面目、責任感が強い。
まっすぐな性格の持ち主で異母弟を守り、可愛がる。

クレメント・ジラルディ

若い頃から戦場で過ごし、戦場の鬼神と呼ばれる。
好きな人にしか優しくできない。

ミゲル・レオーネ

フラヴィオの異母弟で昔は病弱だった。
気が弱いがい、義兄への歪んだ愛が重い。

マルティン・トレント

侯爵家嫡男で脳筋タイプ。
猪突猛進な性格。

シャル・マリーア・デイーオ

王位継承権第二位。
マルティンの婚約者で剣の師匠はクレメント。

アキレス・フォレストイ

軍の副官で交渉の達人。
クレメントの戦友であり、彼を尊敬している。

プロローグ

幼い私が、心の支えだった母を亡くして三日が経った頃。

仕事を理由に毎日のように家を空けていた父が、愛人宅で過ごしていたと知った。

一月も経たずに父が愛人を邸に連れてきた時も。その相手に自分とひとつしか歳の変わらぬ息子がいたと知った時も。決して感情をあらわにしなかった私が、友人に拳を振るっていた。

——父の愛人の息子を守るために……

右拳に初めて感じた痛み。

ドクドクと心音が激しく鳴り、目眩に襲われたが、なんとか足を踏ん張る。

静まり返る庭園に春風が吹き込む。

頬を押さえて啞然とした表情で倒れている友人を見下ろす。

争い事が嫌いで、喧嘩なんて経験がない私は右手が痛くてたまらない。

それでも必死に痛みを耐える。殴った相手が、格上の侯爵子息だと頭ではわかっていた。

だが、止められなかった。

この日を境に、私の運命は大きく変わることになる——

第一章 軟禁の始まりと異母弟の思い

レオーネ伯爵邸で連日開かれる盛大なパーティーにうんざりし、気分転換に庭園に足に向けた。
『フローラ夫人が亡くなって、まだ二か月も経っていないのに——。非常識だわ』

『ええ、それにあのドレス。センス以前の問題よ』
『准男爵家の田舎娘が、伯爵夫人になったと喜んでいられるけれど……。あれじゃあまるで娼婦じゃない』

『フラヴィオが可哀想よ。アレが義理の母親になるだなんて——』

どこへ逃げてでも招待客の声が耳に届く。

可哀想な子を見るような目が、母の面影を色濃く映す私をどこまでも追う。

母——フローラの死を悼む者は多かった。

死因が過労だったと公表はしなかったが、フローラと交際のあった友人たちは皆勘付いていた。

それなのに、父のフィリップは喪が明ける前に後妻を迎え、愛人のミランダの子のお披露目を開いたのだ。

おかげで、元々お飾りだと言われていたレオーネ伯爵の評判は地の底まで落ちていた。

周囲から向けられる、冷ややかな視線にも気付かない呑気な父親。

念願の伯爵夫人の座を射止め、喜色満面になっている義理の母。

ふたりを心底軽蔑したが、母の次を守りたいと思える人を見つけた。

苦しそうに咳き込みながら、唯一、頭を下げた人物——異母弟のミゲルだ。

ミゲルが白い頬を染めて『兄様っ』と初めて呼んだ時、嬉しくて心が温まった。

母を亡くしたばかりの私は、新しい小さな家族を歓迎したのだ。

体が弱くて、控えめな性格の異母弟。

カールした栗色の髪が愛らしく、同年代の子よりも体は小さい。

ひとりになりたくて邸から逃げても、いつも陰からこっそりついてきた。

どんな立場であれ、ひとりぼっちの私を気にかけてくれる存在だった。

義母の印象が悪かったせいで、なおさらミゲルが素直で心が清らかな天使のように思えたのだ。

口さがない招待客を避けるように歩いていると、庭園の噴水の前で友人たちに両脇を抱えられた異母弟の姿を目撃した。

泣いて嫌がるミゲルを無理やり噴水に突き落とそうとする様子が、やけにゆっくりと映った。

頬を涙で濡らしながらミゲルが叫ぶ。

「たすけて、兄様ッ」

カッと頭に血が上り、気付けば異母弟のもとへ駆け出していた。

ミゲルを捕まえてゲラゲラと笑う輪の中心人物、リーダー格の侯爵子息を力いっぱい殴った。

その少年、マルティンが吹っ飛ぶ。

彼は騎士団長の息子でもあり、友人たちの中で一番体格に恵まれていた。

その彼が初めて殴り倒されたところを見て、友人たちは絶句した。

だが、完全に不意打ちだった。

「ミゲル、大丈夫か」

「っ……」

涙が引っ込んだ様子のミゲルはその場で腰を抜かしていた。

それでも私が手を差し伸べれば、安堵したのかまた泣き始める。

嘔り泣く^{すす}声に胸が苦しくなるが、同時にどうしたものかと冷静になった。

「っ、クソッ!! なんなんだよ!! 俺たちは、お前のためにやっただぜ!」

「そ、そうだよ、フラヴィオ。非常識な奴に、貴族としての礼儀を教えてただけだ!」

我に返り、やいやいと言う私の友人たち。

実際には、私を心から想ってくれている者などいないだろう。

彼らの行為は弱い者いじめにしか見えなかった。

——ミゲルは、私の弟だっ。

私は迷いなく叫んだ。

「……なにがあっただ？」

すぐに騒ぎを聞いて駆けつけた大人たちに、なにが起こったのか問いかけられる。

だが、誰も口を開かない。

頬を腫らしてまだ地面に腰をついたままのマルティン。

彼の背後に立つ子息たちは目を伏せた。

そんな彼らと対峙する私は、泣いているミゲルを守るように立つ。

集まった人々は、私が愛人の息子を可愛がっていると知らず、その状況に困惑している様子だった。

「ミゲルッ!!」

そこへレオーネ伯爵夫妻がやってきて、一目散にミゲルを抱きしめた。

夫妻は嫡男の存在を無視して声をかけようとしめない。

周囲から同情の視線を集めて、いたたまれなくなった。

「なにがあっただ!?」

「っ……血がッ!! 怪我をしているわ!? きつといじめられたのよッ!!」

「と、とにかく怪我の治療をしなければっ。おい、早く医者呼べっ!」

正妻が死んでも狼狽^{うろた}えなかったレオーネ伯爵が、一大事とばかりに声を荒らげた。

ミランダは足の擦り傷を大袈裟に慌てふためき、使用人には任せられないとばかりにミゲルを抱いて邸へ駆け込む。

「兄様がっ!」と必死になにか言おうとしているミゲルの声が遠ざかる。

そこでようやく父が私に気付き、あろうことか怒鳴り声を上げた。

「ミゲルになにをしたッ!!」

私が犯人だと決めつける父に、集まっていた招待客が眉を顰めた。
なにもしていないと答えたところでこの男は信じないだろう。

自分の都合の良いようにしか解釈しない父を、無言で睨みつけた。
少しの間沈黙が訪れる。

すつと立ち上がったマルティンがなにと言おうと口を開く。

「っ、あ、あのっ——」

「フラヴィオを連れていけッ!! 反省するまで、部屋から出さなッ!!」

父がうんとすんとも言わない私に業を煮やし、使用人に向かって叫ぶ。

フローラを敬愛していた使用人たちだが、当主の命令は絶対である。

今は指示に従いましょうとばかりに目配せされ、自室に向かうことにした。

その際に友人たちを見れば、皆が私から目を逸らす。

呆然とするマルティンの気持ちはわからなくもないが、友人らも証言するつもりはないようだ。

だが、その方が都合が良かった。

異母弟がいじめに遭っていたとはいえ、私も手を出してしまっている。

ただの兄弟喧嘩だと思われた方が大きな問題にはならない、そう瞬時に判断していた。

そして、その場は解散したが——

現場を見ていないミランダがミゲルは私にいじめられたのだと話し、父はその言葉を鵜呑みに

した。

ミゲルは泣きながら違うと必死に話したが、無視された。

そして使用人たちも口を噤んだ。レオーネ伯爵家の者がマルティンに手を出したと露見すれば、

その父親であるトレント侯爵から確実に抗議される。沈黙は私を守るための判断でもあった。

結果、罰として自室に軟禁されることになり、食事も与えられなかった。

だがなんとも思わなかった。

朝晩二回、たまに昼間にも、バルコニーに贈り物が届いたのだ。

隣の部屋の小さな主人が私のためにパンをくすねてくれて、謝罪と感謝の手紙も添えられていた。

大好きな気持ちが溢れる手紙を秘密裏に交換し合うふたりの仲は深まるばかりだった。

それから一週間後——

やっとささやかな食事が出されるようになる。

さすがに餓死しては困るからだろう。

体を動かせず、自室でぼんやりと過ごしていると、少しずつ気力が失われていく。

立ち上がると目眩がして、いつのまにか起き上がることも困難になっていた。

事件から一か月が経過した。

今日も部屋の前で言い争う声が聞こえる。

ミゲルが毎日のように、私を助け出そうとしてくれているのだ。

「兄様は悪くないんですっ！ 早く兄様に会わせてくださいっ！」

「ミゲル……。フラヴィオを庇^{かば}わなくなったっていいんだぞ？ 悪いことをしたら、反省しなければならいんだ」

父親らしく厳しく告げた低い声。

どの口が言うんだと、はらわたが煮えくり返る。

ミゲルはレオーネ伯爵家に来るまで、父親が妻子持ちだと知らなかった。

なにせ父は毎日ミランダとミゲルの住む家で生活していたのだ。

ほとんどの時間を家族三人で過ごしていたため、彼は父親が他に家庭を持っているだなんて思いもしなかったのだろう。

（ミゲルは被害者だ……）

「フローラの育て方が悪かったんだ……。全てあの女の責任だ。苦勞をかけてすまないな、ミランダ」

「きつとフラヴィオは私が気に食わないんだわ。だから、私の愛するミゲルを標的にしたのよつ。私が罵声を浴びせられるのはいけけど、ミゲルだけは守りたいのっ」

さも普段から罵声を浴びせられていると言わんばかりに語る涙声に、虫唾^{むしず}が走った。

「ああ、わかっている。お前たちは私が必ず守るから安心していい」

「さすがフィリね、頼りにしてるわ」

母親を亡くした私に寄り添うどころか、前妻に似て可愛げがないと嫌悪する父親。

ほとんど会話をしたことがないのに、私に嫌われていると父の同情を誘う義母。

ミゲルの声が聞こえなくなっただけに気付き、落ち着かなくなる。

（大好きな両親の醜い面を知って、ミゲルは今どんな気持ちなんだろう……）

その時、ミゲルの泣きそうな声が響いた。

「兄様はマルティン様たちからいじめられていた僕を、守ってくれただけなんですっ!!」

今度は父と義母のふたりが沈黙する。

今すぐ飛び出していきたいが、体が思うように動かない。

寝台に横たわったまま扉に視線を向けることしかできなかった。

（ミゲルには、真実は話してはいけなくと手紙で伝えていたが……まだ十二だ。無理もないか）
どうしても私を助きたいミゲルは全てを洗いざらい話してしまったようだ。

（非常にまずい状況だ……。私のせいでトレント侯爵家と揉めてしまう）

頭を抱えなくなったが、そんな心配は杞憂^{きゆう}に終わる。

「ま、まさか、フラヴィオからの報復を恐れて、そんな嘘を……？」

父のとてもない発言が聞こえ、私は啞然とした。

「っ、嘘をついてはいけないわ？ ミゲルは今までもとてもいい子だったのに……。フラヴィオの影響ね!？」

「あ、ああ、そうに違いない。ミゲル、フラヴィオと関わるのはやめなさい」

「っ……なんでそうなるんですか!? 僕は兄様が大好きなのにつ!!」

ミゲルの悲痛な叫び声が聞こえたものの、その後は同じ会話の繰り返しだった。夫婦はミゲルの願いを聞くどころか、私を悪に仕立て上げた。なにせふたりはすでに私を部屋に軟禁し、食事も粗末なスープのみだ。父は自分が間違っていたと認めたくない。

だからミゲルが私からの報復を恐れるあまり、マルティンたちが悪者だと言うのだと自分の都合の良ように解釈する。

そして義母もまた、私がミゲルを守ったなど信じたくないのだろう。加えてミゲルを当主にしたい義母にとつては私を悪とした方が都合がいい。(自分のことしか考えていないふたりで、ある意味良かったのかも……?)自嘲気味に笑った私は問題が解決したことに安堵し、静かに目を伏せる。瞼の裏に熱いものが込み上げてきたが、きっと気のせいだと言い聞かせて。



原因不明の病を患い、監禁生活が始まりを告げてから三度目の秋を迎えた。療養中の朝は早い。

ノックもなしに入ってきた使用人たちの声が目覚まし代わりだ。

「ねえ、シーツ交換はどっちがする？」

「そんなの、明日でいいでしょ」

「もうっ。本当いい加減なんだから」

「だって病気がうつたらどうするの？ 私、早死にしたくないものっ！」

そう言い切った丸顔のメイドが室内を丸く掃除し始める。

ここ十日間、同じ会話をするふたりがドタバタと動き始める音がした。

そろそろシーツを替えてほしいが、その願いは叶えられそうにない。

「ま、明日でいいか！ ……ていうか、昨日も同じこと言っただけだった？」

「そうだった？ そんなことより、今日はアロンとデートだからさっさと終わらせるわよっ！」

「それも昨日聞いたっ！」

けらけらと笑うふたりのメイドは、三年前から私の世話を任されている。

早く仕事を終わらせ、自由時間の確保に専念している。

本来ならば、ふたりにそんな時間などない。

私の容態が急変した時に駆けつけられるよう、病人のそばにいるべきなのだが、急死しても構わないと思っているのだろう。

(……むしろ、その時を待ち望んでいるのかもしれないな)

空腹であり眠れなかった私は、目を閉じたままぼんやりと考えた。

「フラヴィイオ様。きちんとお薬飲んでくださいね」

寝台のすぐそばにある小さな木製の机に水と薬だけが置かれる。

今日も朝食を用意する気はないらしい。

空腹状態で薬を飲めば胃が痛くなる。せめてスープくらいは出してほしかったと思ったが、溜息を堪えた。

「やることやったし、早く行きましょ？」

「ちよつと待って。さすがに薬は飲ませないとダメよ！」

「はあ〜？ めんどくさっ」

箒で突かれる前に目を開ける。

薬を飲むようにと告げる声を見直し、辺りを見回した。

部屋の隅には相変わらず埃が溜まっていたが、ふたりとも全く気にしていない。

自室から追い出されはしなかったが、金目の物はいつのまにか綺麗さっぱりなくなっていた。

「フラヴィオ様？ お薬を——」

「ゴホッ、ゴホッ……」

話を遮るように咳き込めば、窃盗の容疑者ふたりが揃って顔を顰める。

レオーネ伯爵家の嫡男に対する態度ではない。

だが、この邸に使用人の態度を咎める者は誰ひとりとしていなかった。

同じ空気を吸いたくないとばかりに窓を開けるメイドの背を眺める。

（ようやく新鮮な空気を吸えたな……）

心地良い風を受けて、ゆっくりと体を起こした。

「起きたなら、早く薬を飲んでください。咳が止まりますから」

顎で指示を出すメイドを横目で見て、薬を手にする。

「私も早く飲みたい気持ちはやまやまなんだが……」

「それなら——」

「胃になにもない状態で薬を飲むいつも胃が痛くなる……。体調が悪化してしまうから、怖くて飲めないんだ」

悲しげな表情を浮かべてみせた。

薬を遠ざけるように押すと、背の高い方のメイドが唸るように言葉を発する。

「……………朝食をお持ちします」

「ああ、ありがとう。助かるよ」

優しい口調でお礼を述べた私に、あれだけ愚痴をこぼしていた丸顔のメイドが頬を染める。

いくら嫌われ者といえど、こちらが優しく接すれば、メイドの態度は僅かながら軟化した。

その後に運ばれたスープは普段使用人たちが食べているものと同じものだった。

たくさんの野菜の切れ端が入った薄味のスープ。

貴族が口にするものではないが、用意されるものは粗末な食事が基本だ。

義母の命令なのだろうが、原因不明の病を患う私にとってはこの薄味のスープがちょうどよかった。

「ふう。美味しい……。猫舌だから、ちょうどいいよ。ありがとう」

冷めたスープは嫌がらせのつもりなのだろう。

だが、空腹の私にとっては胃に入ればなんでもよかった。

メイドのふたりは、粗末な食事に文句も言わず、むしろ感謝の言葉を告げる私を見つめ、困惑した表情を隠しきれていない。

「私、時々思うんだけどさ。フラヴィオ様って、本当にミゲル様をいじめるような人なのか……？」

「……………事実がどうであれ、私たちには関係のないことよ」

「やっぱりあなたも私と同じ気持ちだったのね？」

私が後妻の息子を虐^{しいた}げたという噂を聞いていたふたりが、コソコソと内緒話をする。

私は特に気にした素振りを見せず、ゆつくりとスープを口に含む。

監視するような視線を受けて、ちらりと薬に視線を送る。

（私の体調が回復しないのは、やはりこの薬が原因なのだろうか……）

薬を怪しむようになったのは最近のことだ。

仕事を放棄しても注意されないとわかったふたりは、日に日に夕飯の用意を怠ることが多くなった。おかげで薬を飲めない日が続いていたのだ。

医師に薬を多めに処方してもらおうと思っていたが、薬を飲んでいない日の方が体調はマシになっていった。

「『馳走様』

「……………」

ふたりが退出する様子は見られない。

朝だけでも、私が薬を飲むところを見届けるつもりなのだろう。

スープを飲み終え、渋々ながらも薬に手を伸ばした。

「歳下だけど素敵ッ。フラヴィオ様ならアリだわ？ もちろん、病気が治ったらの話だけどっ」

「……はあ。本当に面食いなんだから。今はミゲル様がいらないから大人しいだけで、顔を合わせたらなにをするかわからないでしょう？」

「そ、そうかもしれないけどさあ。いじめてるっていうより、ミゲル様がフラヴィオ様にゾッコンじゃ——イテッ」

薬を飲み終えると、近くに立つ背の高いメイドが、お喋り好きな丸顔のメイドに肘打ちをする。

「また明日」と告げたふたりの背を、笑顔で見送った。

悪意のある噂は事実無根なのだが、異母弟のミゲルは学園に通うために寮に入っている。

長期休暇の時しか顔を合わせることはできず、会えるとしても深夜にこっそりと……

今は誰もいないバルコニーを眺め、小さく笑みをこぼした。

成長したミゲルは、かなり離れた距離にあるバルコニーから、命綱なしで飛んで現れるのだ。

最初は肝を冷やしていたが、ミゲルは余裕^{ゆき}綽々^{しゃん}だった。

随分とヤンチャに育ったものだ、異母弟の成長ぶりに感心していた。

そこへ、重石を乗せた分厚い手紙が飛んてくる。

異母弟のことを思っていたところに、ミゲルからの手紙が届いたのだ。

(つ……ミゲル)

手足の痺れを感じながら、なんとかバルコニーに出ると、隣の部屋に入っていく使用人の後ろ姿が見えた気がした。

ミゲルが寮に入ると同時に、レオーネ伯爵家に雇われた青年が届けてくれたのだろう。

ダリオという名の青年だ。貴族の子息が学園に入学する際には、使用人を連れていけるのだが、そのために雇ったわけではない。

心配性のミゲルが、残された私のために頼んでくれたのだろう。

ダリオはミゲルの古くからの友人であり、ミゲルと私の仲を知っているようだ。

そうでなければ、ミゲルからの手紙が届くはずがないのだから――

療養中の楽しみである、ミゲルからの手紙を読み始める。

重石など必要のないほど分厚い手紙には、学園でのことより、私を心配する内容が大半だ。温かい手紙に頬が緩むが、最後の一枚に目を通し、絶句した。

――学園では、兄様は手のつけられない暴君であり、表には出すことのできない野蛮人だと噂されている。いくら僕が、根も葉もない噂だと否定しても誰も信じてくれない。

それでも必ず噂を払拭しますと、力強い字で書かれていた。

(これは、困ったことになったな……)

病に蝕^{むしば}まれているものの、いずれ私はレオーネ伯爵家の当主となる。

悪評が立つては、今後当主として動く際に支障が出てしまう。

金を管理していたフローラが亡くなり、きつと父と義母はやりたい放題だろう。

領民についてなど考えていないことくらい、軟禁状態でも容易に想像できた。

情報収集をする必要があると判断し、まずは身近な者を味方につけるため動くことにした。

――翌朝。

早速、行動に出た。

夕飯抜きだったが、薬を飲んでいないためか、そこまで体調は悪くない。

それでも空腹には違いないが……

私がかき回していたことに驚いたメイドのふたりだったが、いつものように掃除を始める。

「すまないが、机の引き出しからブローチを取ってくれないか？ エメラルドのやつなんだが……」

背の高い方のメイドに頼めば、目が泳いだ。

いつもは頼み事などしない私が、声をかけたからというわけではないだろう。

瞬時にそのことを見抜いたが、笑顔で願う。

彼女はどちらかといえば真面目な性格だろう。探せと言えば、探してくれるはず。

そう判断し、その場で固まっているメイドに視線を送り続けた。

すると、同僚がなかなか動かないことに焦れた丸顔のメイドの方が、引き出しを開けて中を漁^{あさ}る。

「そんなもの、ありませんよ？」

「……おかしいな。もつとよく探してみてくれないか？」

「きちんと探しましたが、見当たりません。私たちが働き出した時からなかったと思いますよ？」

「いや、あのブローチだけは必ずあるはずだ」

引き下がりずにいると、丸顔のメイドがふくれっ面をする。

引き出しの中のを全て机に置き、これでどうだとはかりに仁王立ちしていた。

困ったように首を傾げる私は、そのブローチをととても大切にしていたとアピールする。

それでもないものはない。すでにどちらかが、換金しているのだろう。

それをわかつていながらも私は悲壯感を漂わせ、笑ってみせた。

「私の母上の形見なんだ」

「……………」

さすがにまずいと察したのか、見る見るうちにふたりが青褪める。

沈黙が流れたが、焦った丸顔のメイドが部屋中を探し始めた。

彼女たちが必死な形相なのは、ありもしないブローチを探しているからではなく、なんと言い訳をしようかと考えているからだろう。

単なるお喋り好きのメイドだと思っていたが、意外と賢い子たちだ。

そして戻ってきた彼女が震える口を開く。

「は、伯爵様が、以前、フラヴィオ様のお部屋に来たことがありました……」

レオーネ伯爵のせいにしたメイドは、瀕死状態の同僚に同意を求めている。

（……そう来たか。狡猾い子だ）

彼女は、以前、父が部屋に来ていただけ話している。

父が盗んだ可能性があると匂わせているが、犯人とは言っていない。

それに、今の私が父に文句を言ったところで、相手にされないとわかっているのだ。

「そうか……」

小さく呟いた私は、肩を落とす。

大切なものをなくし、取り返すことは無理だと、意気消沈しているように見えるだろう。

ようやく諦めたと思ったのか、ふたりの強張っていた表情が緩んだ。

「今度から、引き出しには鍵をかけた方がよいかもしれませんね？」

明らかにほっとしている丸顔のメイドは、話は終わりだとはかりに背を向けた。

おそらく犯人であろう背の高いメイドは、ちらちらと私を見ていたが、「朝食を……」と小声で話す。さつさと仕事を終わらせて、逃げたがっているのが伝わってくる。

だが、ここで引き下がるわけにはいかない。

「昔、約束していたんだ。学園で良い成績を収めたら、ミゲルにプレゼントするって……」

ミゲルの名前を出せば、ふたりが息を呑む。

「母上の宝石は他にも山ほどあるが……。それでもいいかと聞いてみる必要があるな？ ミゲルはエメラルドがいいと話していたから、納得してくれるかはわからないが……」

山ほどある、は真っ赤な嘘だ。しかし、宝石の類があつたのは事実。

死が迫っているとわかっていたのか、フローラは資産を宝石に換えて遺していた。

きつと遺産は、父に全て奪われると察していたのだろう。

黙り込むふたりに、微笑を浮かべて追い打ちをかける。

「もうすぐ長期休暇だろう？ ミゲルは賢い子だから、きつと学園でも良い成績を収めているはずだ。ミゲルが好みそうなものを選びたいから、用意してくれないか？」

「……………」

「あつ、そうだ。ふたりの意見も聞かせてほしい。ミゲルを喜ばせたいからね？」

うきうきと、無邪気に笑ってみせれば、もう限界だとばかりに背の高いメイドが平伏した。

「も、申し訳ございませんっ!! 私には兄妹がたくさんいて……。それで……。日々の生活のために、フラヴィオ様の大切な宝石を、売ってしまいましたっ。形見のブローチは、なんとかして取り戻します。私はどのような罰でも受けますっ、だから、家族だけは……。っ」

——助かった。

母の宝石を根こそぎ奪われているのだが、安堵する。

メイドが白状するかは、一か八かの賭けだった。

なにせ証拠はなにひとつない。彼女が白を切り通していれば、父に放置されている私は、これ以上追及することができなかったのだから。

知性が足りない父だが、あれでも現レオーネ伯爵だ。最悪の場合、メイドを窃盗犯に仕立て上げた、私が罰を与えられる可能性も頭にあった。

それに、メイドふたりが罪を隠蔽するために、私に手をかける可能性も考えていた。

男性とはいえ、心身ともに弱っている状態だ。

元氣澁刺^{はつち}なふたりに羽交い締めにされた時、勝てる見込みは皆無。

そして仮に私が死亡したとしても、この邸にいる者は悲しむどころか、喜ぶだけだ。

殺害されたとしても、病で亡くなったと偽られることになるとも考えていた。

「そうだったのか……」

優しい声で告げる。決して責めるつもりはない。

涙するメイドが真実を話しているかはわからないが、彼女にも事情があったらしい。

だからといって、盗みは許せないが……

それでも、彼女の顔を上げさせた。

「すまない。もし私が君の家庭環境を把握していたなら、もっと早くに宝石を渡していたのに……」
思いがけない返答に、白状したメイドが涙を浮かべていた目を丸くする。

はくはくと動く口はなにか言おうとしていたが、音にはならなかった。

「当然だろう？ いつも私の身の回りのことをしてくれているんだ。私の宝石で君の家族が幸せになれるのなら、有効活用した方がいい。なにせ私は、外出できない身だからね？ 宝石を眺めていたところで、お腹は膨れないよ」

開いた口が塞がらないメイドを見下ろし、優しく微笑む。

そつと手を取れば、泣いていたメイドがほんのりと頬を染めた。

「っ……フラヴィオ、様っ……」

そして恍惚とした表情で見つめられる。

だが、なかなか力が強い。

想像でしかなかったが、激昂した彼女に首を絞められていたら、あの世行きだっただろう。

ゾツとしたが、笑みを浮かべたままだ。

（……なぜ、手を離してくれないんだ？）

少しばかり困っていると、丸顔のメイドも平伏した。

「両親の借金で、娼館に売られそうになったんですっ。最初はこのお邸で働いているからと、少しずつ返済していました。でも、利息しか返せない状況で……っ。それなら妹を娼館に連れていくと脅されてっ。まだ十歳なのに……。それで、宝石は借金返済に使ってしまいました。大変申し訳ありませんでしたっ」

許されたとわかった瞬間に、彼女もあっさりと白状した。だが、内容がなかなか重い。てっきり交際相手との逢瀬に金を使っていると思っていたが、ふたりとも深い事情があったようだ。

真実なのはわからないが、ふたりが嘘を言っているようには見えない。

それに、もし作り話だったとしても別に構わなかった。

「ふたりとも、私と同じだね？」

「……へっ」

「兄妹を大切に想っていることが伝わってきたよ。宝石のことは気になくていい。ただ、これか

らは私の話し相手になってくれないか？」

私の提案を聞いたふたりが、きよんとする。

「そうすれば、また君たちが困った時に、こんな私でもなにか力になれるかもしれない」

きつと今の自分では、彼女たちになにもしてあげることはできないだろう。

不甲斐ないと思いつつ、私はにっこりと微笑んだ。

外の情報が欲しいと思っていたが、話し相手が欲しいのも本音だった。

泣きじゃくるふたりが、寝台上に腰掛けている私の足にしがみつく。

「っ……フラヴィオ様ッ!!」

「私、一生フラヴィオ様についていきますっ！ 見捨てないでくださって、本当にありがとうございますっ！」

「宝石は、一生働いて、必ずお返しいたしますっ。だから、それまではずっとフラヴィオ様のおそばに置いてくださいっ」

ふたりの頭を優しく撫でながら、これからもよろしく頼むと声をかける。

ただ、ふたりの重さに耐えきれず、足は若干震えていた……

ふたりが話し相手になって一週間が経った。

私の予想以上に、仕事熱心なメイドに成長を遂げていた。

「おはようございます、フラヴィオ様。今日はとてもいいお天気ですね？ 窓は開けておきますが、

寒くなったらすぐに教えてください」

背の高いメイド——キャシーが、私が咳き込む前に窓を開ける。

私が快適に過ごせるようにと、隅々まで丁寧に掃除してくれる。

そして、せっせとシーツ交換をする丸顔のメイド——マリカ。

着替えまで手伝おうとするマリカは、面倒見が良い子なのだろう。

「フラヴィオ様、湯浴みをなさいますか？」

「っ……いや、大丈夫だよ」

「そう仰らずに！ 全てこのマリカにお任せくださいっ！」

そう言っ、胸を張るマリカ。

私のためなら、なんだってやりそうなマリカの気持ちは素直に嬉しい。

だが、どうしても痩せた体を見られたくないため、困った申し出でもあった。

どう切り抜けようかと考える私は、そっと胸元を押さえた。

「感染する病ではないとは思いますが、君の体調が悪くなってしまったら、私は……」

胸が痛むとばかりに告げること、マリカは感動したように焦茶色の瞳を潤ませた。

なんとか湯浴みは逃れることができたが、今度は体を拭こうかと食い下がる。

あれだけ私に触れることを嫌がっていたのだが、今は諦める気配がない。

「では、髪だけでも……」

私が困っていると察したのか、キャシーが「やめなさい」と声をかけてくれた。

テキパキと掃除をしていたが、後ろで束ねられた深緑色の髪は一切乱れていない。

厳しいメイド長のようにも見えるキャシーが、内心助けを求めている私の前に立った。

「フラヴィオ様、私には姉妹が五人いて、いつも髪をセットしてあげております。ですので、髪は

慣れている私が担当します」

「はあっ!? 私だって慣れてるわよ!!」

なぜかキャシーも名乗りをあげ、口論になる。

ふたりの心酔ぶりは、私の想像の域を遥かに超えていた。

(……思っていた展開とは違う)

「ふ、ふたりとも落ち着いて。私は、部屋の掃除をしてくれるだけでも感謝しているから……」

結局、その場は収めたものの、毎日のように懇願されている。

のらりくらりと躲^かす私は、メイドふたりを懐柔することに成功した——はずだと、とりあえず安

堵^かしていた。

それから、私がなにも言わなければ、一日中そばにいそうなふたりが退出する。

彼女たちには、以前と変わらず自由時間を与えていた。

ふたりが私の味方についたことを、今はまだ隠しておきたい。

そして外で見聞きしたことを、夕飯の時間に話してもらうためだ。

ちなみに安いお駄賃も渡していたのだが——

「自分たちのために使えばいいものを……」

呆れたように呟いたが、自然と唇は弧を描く。
ふたりの一週間分の駄賃は、古本となって戻った。

暇潰しになればと用意してくれたのだろう。

その気持ちが嬉しくて、何度も何度も読んでいる。

かつて読んでいた歴史書などのお堅い内容の本ではなく、恋愛小説だが……

「恋愛、とは難しいものなのだな。どうしてこのような思考になるのか、理解しがたい……。だが、そこが面白いところでもあるのだろう」

恋など無縁な私には、覚えるだけでよい歴史やマナーなどよりも、ある意味難しい内容だ。

そして夕飯時、いつもの薄味のスープは温められ、デザートも用意されていた。

すりおろした林檎を持ってきてくれたキャシーにお礼を言ったが、明らかに元気がない。

私に関することだろうと察し、話してほしいと声をかけた。

「実は……。税が上がったのですが……。その理由が、レオーネ伯爵家の嫡男が、贅沢をしているからだ……」

父が税を引き上げていたことにも驚いたが、領民にまで悪評が流れていたのかと、頭が痛くなる。

「私の姿を見てはいないが、皆はその噂を信じているのだろうか？」

「……はい。商人たちが、伯爵邸に何度も足を運んでいる姿を目撃されているため、信憑性が高いと思われる……」

「私なんて、フラヴィオ様が隣国に留学した費用のためだつて聞きましたよ？ フラヴィオ様は、

療養しているだけなのにつ！」

林檎を丸齧りするマリカが憤慨している。

栗鼠りすのようで可愛らしいのだが、右手に持っている果物ナイフは、早々に仕舞ってほしい。

私がなにも言わずとも、今のふたりは私の味方になってくれているのだろう。

そのことがわかっただけでも、充分嬉しかった。

にこにこしていると、キャシーが「笑い事ではありませんっ！」と声を荒らげる。

「ははっ、すまない。だつて面白くて……」

「なにも面白いことなどないのに」とふたりが不服そうな顔をしている。

そんなふたりをよそに、優雅にすりおろした林檎を口に含む。

そしてさりげなく、菓は懐に仕舞った。

「留学生になったフラヴィオ・レオーネは、この国で贅沢をしているのか、と思うと、その矛盾が面白くてね？ つい、笑ってしまったよ」

暗い雰囲気にしたくなくて、意識して笑みを浮かべる。

噂を否定するような行動は取らないようにと約束させられているふたりは、なんとも言えない表情で黙り込んだ。

ふたりが退出したのち、浴室で菓を処分する。

排水溝に菓が流れていく様子をぼんやりと眺め、軽く息を吐いた。

本当ならば彼女たちに薬のことを話して、コソコソせずに処分したい。

だが、ふたりは顔に出やすいのだ。

狡猾な義母は、使用人たちに私を虐げるようにとは命令していない。

ただ、四面楚歌になるように言葉巧みに話してはいるだろうが。

（メイドとしての仕事を全うしているだけなら、解雇は免れるはず……。だが、薬を飲ませていないことが露見されれば、話は別だ）

義母がお得意の嘘で、ふたりの罪を捏造することは造作もない。

間違いない処罰されることになるだろう。

彼女たちに薬の件を話さないのは、私なりの配慮だった。



そうして月日は流れ、冬を迎えた。

飾り気のないモダンテイストの部屋の本棚には、恋愛小説が十冊以上並べられていた。

「フラヴィオ様、おはようございます。……またわからないところがあつたのですか？」

きちんとノックをして入ってきたキャシーが、私の手にしていた本を見てくすりとした。

「ああ。同性婚は認められているが、なぜ、兄弟で婚姻が可能なんだ？ 法に触れる行為では……」

「もう一つ。そこ、躓くところですか!？」

朝一番に、理解できない箇所を質問する私に、マリカ先生が答える。

ふたりがいろいろと教えてくれているのだが、私にはさっぱりだった。

恋愛に関してはダメ出しまわうが、その時間がすごく新鮮だ。

それから私の噂だけでなく、巷ではなにが流行っているかなど、他愛もない会話を。

話し相手がいるというだけで、穏やかな毎日を過ごすことができていた。

だが、心配事は解決していない。

学園だけでなく、領民の間でも私は暴君だと悪評が立っている。

噂の所は、当然レオーネ伯爵夫妻だろう。

いくら母のフローラが領民から愛されていたとはいえ、今は彼らの生活が困窮している現状だ。

自分たちの生活が苦しくなれば、周りが見えなくなるのも無理はないだろう。

仕方がないことだと思うが、憂鬱な気持ちになる。

フローラの実家である、サヴィーニ子爵家に助けを求めようかと思ったものの、迷惑をかけるだけだろうとやめておいた。

ただ、マリカとキャシーには、なにかあつたら子爵家に逃げろと話してある。

紹介状を書いてはあげられないが、きっと私の名を出せば、ふたりくらいならメイドを雇ってくれるだろう。

（母の遺した宝石を盗んだが、充分反省してくれている。今のふたりは、私の数少ない友人だ）

かつての事件がなければ、母からの贈り物を手放すことなく、当たり前のように友人もいただろう。

う。きつと同級生たちと仲良く学園生活を送り、健康体のまま当主になっていたと思う。

学園で人脈を築き、領民のためにも父と義母をさつさと追い出すことができていたはずだ。それでもミゲルを守った行動を後悔したことは、一度としてなかった。

「もうすぐ、ミゲルに会えるな」

「っ、ついにですね！ 深夜の密会ッ！ 禁断の恋だわっ!!」

「……………弟に深夜に会々と、禁断の恋になるのか？」

私の呟きは、きやつきやしている恋愛面での教師ふたりには届いていなかった。

本日のレオーネ伯爵邸は、朝から騒がしい。

なにせ今日は、久々にミゲルが帰ってくるのだ。

今宵は会いに来てくれるだろうか、胸は弾んでいた。

「今日こそ、髪を結いましょうね？」

「フラヴィオ様の元気なお姿を見れば、ミゲル様もお喜びになるかと」

二月も経てば、マリカとキャシーは私の気持ちを察してくれていた。

「今日だけは……」と口にする、ふたりは瞳を輝かせる。

義母の椿油を拝借していたキャシーが、丁寧な髪のアをしてくれる。

碌な手入れをしておらず、傷んでいた金色の髪からは良い香りがしていた。

長い髪を編み込んでもらい、右横に流す。鏡に映る顔色は、幾分かマシだ。

マリカに化粧水を塗りたくられたが、それが理由ではないと思う。

食後のデザートとして、毎日果物を食していたおかげだろう。

ふたりが厨房から、せつせと果物を盗んできていたおかげでもある。

「はあ……。素敵です、フラヴィオ様……」

恋する乙女のように、うつとりと呟いたマリカ。

褒めすぎだろうと肩を竦めたが、キャシーも満足そうに頷いている。

少し髪型を変えただけで、知らないうちに気分も上がっていた。

——皆が寝静まった頃。

ミゲルとの再会を待ちきれなくて、バルコニーに出ていた。

なぜかいつものように寝巻き姿ではダメだとマリカに言われ、きちんとした格好だ。

（と言っても、昔着ていた服だが……。それに、少しぶかぶかな気がする……）

成長が止まってしまったおかげで、三年前の服もなんとか着ることができた。

（……まさか。寝巻き姿だと、私がミゲルを誘惑するとも思ったのか!）

毎日のように恋愛小説を読み、浅い知識を得ていたせいか、的外れなことを考えていた。

しばらく冬夜を照らす満月を見上げていると、はっと息を呑む音がある。

「っ……兄、様……」

左隣の部屋から静かに出てきた、背の高い青年。

くるとカールしていた栗色の髪は、さっぱりと整えられている。
随分と男らしい顔付きになっていたミゲルに、私は笑みをこぼす。

だがミゲルはというと、信じられないものを見たかのように固まっていた。

「ミゲル……？」

名を呼ぶと、ミゲルはすぐに手すりにのぼった。

空を自由に羽ばたく鳥のように跳躍する。

あっさりと飛び移ったミゲルに驚いていると、ミゲルはすぐさま上着を脱ぐ。

それを、そっと肩にかけてくれた。

「兄様。早く部屋に入りましょう」

思いやりのある行動に胸が温かくなったが、なぜか声が出なかった。

ミゲルの表情が、いつもと違っていたからだ。

（飛びつかれると思っていたが……。珍しく機嫌が悪い気がする）

なにかあったのかと聞きたかったが、言葉を飲み込み、ふたりで部屋に入った。

ミゲルに促されて寝台に腰掛ける。

だが、なぜかミゲルは隣に座ることなく、無言で部屋を見回していた。

（なにか嫌われるようなことでも、してしまったのだろうか……）

思い当たる節がないのだが、おずおずとミゲルを見上げる。

真っ白だった肌は日に焼けて、健康的な色に変わっていた。

目が合えば、ミゲルがぐくりと喉を鳴らす。

なぜか緊張している様子のミゲルは、私の手を取り、跪いた。

恋愛小説に登場する王子様……というより、主人公を守る騎士のようだった。

「体調は大丈夫なんですか？」

「……ああ、少しは——」

「髪は、誰が？ 誰が、兄様に触れたんですか？ なんて触れることを許したんですか？」

私の返答を聞かずに、どんどんと質問するミゲルに圧倒される。

どこから説明しようかと考えていると、はっとしたミゲルが頭を下げた。

「すみませんでした。この邸には、兄様を疎ましく思う人しかいないから……。兄様の身になにか

あったらと思うと……。僕は毎日、心配で心配でたまらなくて……」

病を克服したというのに、酷く苦しうに告げたミゲル。

離れていても、ずっと心配してくれていたことが痛いくらいに伝わった。

ミゲルが昔と変わらずにいてくれたと歓喜し、抱擁しようと手をそっと離す。

するとミゲルは、どうしてか傷付いたような表情に変わっていた。

「ミゲル、おいで」

病は完治していないが、ミゲルにとってはいつまでも頼もしい兄でありたい。

そう思いながら、両手を広げる。

「っ！」

ミゲルがぱあつと笑顔になった。

だが、昔のように飛びつくことはなく、そうつと体を包み込まれる。

「兄様、お会いしたかったです……」

「ああ、私もだよ。手紙を読んでいたから、ミゲルが元気だとわかっていたが……。それでも早く顔が見たかった」

ミゲルの腕の力が強くなる。頬ずりをされ、主人が大好きな大型犬に戯^{じゃ}れつかれている気分だ。すぐく嬉^{うれ}しいのだが、そろそろ限界である。

「ミ、ミゲル……。少しばかり、力が強——」

遅しい体を支えきれずに、ぼふつと背中から倒れこむ。

ミゲルの腕を下敷きにしてしまっているのだが、気にしている場合ではない。

息がかかるほどの近い距離で、真剣な表情のミゲルに見下ろされていた。

「兄様……」

やけに熱っぽい視線を送られる。

環境が変わり、ミゲルに友人が増える一方で、兄を慕う気持ちが薄れてしまったのではないかと、不安にならなかったわけじゃない。もちろんそんな情けないことを、決して口にはしないが。

それでも、ミゲルも同じ気持ちでいてくれたことが心底喜ばしかった。

ずっと部屋にこもっていた私は、ミゲルと再会する日を心の支えに生きてきたのだ。

ずっと顔が見たいと思っていたが、あまりに熱心に見つめられるものだから、照れ臭くなってし

まい、拗ねた顔をして誤魔化した。

「いくら遅しくなつたとはいえ、兄を押し倒さないでくれ」

「つ……す、すみません」

さつと離れたミゲルが顔を背けるも、耳まで真っ赤になっている。

（大きくなつても、ミゲルは可愛い……）

学園での話を聞かせてほしいと手を引けば、はにかむミゲルは隣に腰掛ける。

終始楽しそうに語るミゲルの話を聞いているだけで、私も自然と笑顔になっていた。

夜が明けるまで語り合う。

声を潜めて……

ミゲルと密かに会うために、昼夜逆転生活が始まった。

生活サイクルが変わつたのだが、体調はすこぶる良い。

理由は、兄弟が密会をしていることを知っているマリカとキャシーが、朝の分の薬も夕飯時に渡してくれていたのだ。

おかげで、ミゲルが帰ってきてから薬を服用していなかった。

一方ミゲルはというと、夜は私と会い、昼間はたまに両親と出かけている。

その際は使用人たちも連れていくのだが、マリカとキャシーも呼んでくれているのだ。

ふたりには特別に、ミゲルから流行りの菓子を買ってもらったりもしているようで、ミゲルにも

随分と懐いていた。

なにも言わずとも、私がふたりにしてあげたいことを、ミゲルが代わりに行ってくれている。心が通じ合っていると思うだけで、日に日に気持ちが悪くなるようになっていった。そして咳き込むこともなくなり、手足の痺れも感じなくなった。

そうなる、私もミゲルと外出したいと欲が出てくる。

だが、マリカとキャシーからミゲルとの話を聞けるだけで、充分幸せだった。夕方に起きると、外出用の花柄のワンピースを着たふたりが帰ってくる。

ミゲルに買ったもらったと喜ぶマリカは、他にもいくつか贈り物の箱を手にしていた。全て今の私の体型に合った洋服だ。

「友人からのお誘いも断って、一日中フラヴィオ様の洋服を選んでいらつしやいましたよ？
ながら、私もアドバイスさせていただきました」

僭越

微笑むキャシーが今日着る服を用意し、残りはどんくろゼットに仕舞っていく。贈り物はもちろん嬉しい。

だが、ミゲルが私を想って行動してくれる気持ち、なにより嬉しかった。

「明日は、髪飾りを買いたいそうですよ？」

私の髪を梳かすマリカが、鏡越しににんまりと笑っていた。

「……髪飾り、か」

愛嬌もあつて人に好かれやすいミゲルであれば、学園でも人気があるだろう。

もしかしたら恋人がいるのかもしれない。

ただ、ミゲルを当主にしたいミランダがしゃしゃり出てくるはずだ。

だから十六になった今も、ミゲルは誰とも婚約していない。

「学園で、想う相手のできたのだろうか……？」

私の問いに、マリカが丸い目をぱちくりとさせている。

兄なのに知らないのか、と言われた気がして、私は思わず眉を顰めた。

「ふたりは知っていたのか？ ……私はまだ聞いていないというのに」

呆気に取られるマリカとキャシーが作業の手を止め、顔を見合わせた。

「至急、恋愛小説を追加しましょう」

「そうね。これは重症だわ？ 頭が堅すぎる病よ」

「……なんの話だ？ 私の体調は随分と良くなっているはずだが」

むすつとした表情を晒してしまいが、ふたりはなぜか喜んでいた。

「ふふっ。フラヴィオ様？ 今夜ミゲル様に、誰に髪飾りを買うのかを聞いてみてください」

仏のような顔をしたキャシーに優しい口調で言われ、頷いた。

（もしかすると、ミゲルに婚約者が決まったのかもしれない？ それなら私が聞かずとも、ミゲルの方から話してくれるだろう）

無理やり聞き出すこともない。

次の日の夜。こっそり会いに来てくれたミゲルに、金色の髪によく似合うエメラルドの髪飾りを

つけてもらっていた。

「よかった、すごく似合ってます」

とても悩んだのだと語るミゲルが、にっこりと無邪気に笑っている。

とんでもない勘違いをしていたことがわかり、恥ずかしすぎていたたまれなかった。

（だからマリカとキャシーは、呆れたような顔をしていたのか……。昨夜、ミゲルに問い詰めるようなことをしなくてよかった……）

いつまでも私の髪に触れていたミゲルが、名残惜しそうに手を離す。

「本当なら、僕の瞳の色のものをプレゼントしたかったですけど……。兄様には、エメラルドが一番似合うと思って」

「……う、うん。ありがと」

目を見ることができず、伏し目がちにお礼を述べた。

（兄の婚約が決まっていないのに、弟の婚約が先に整うはずがないか……）

なぜそのことに気付かなかったのかと、己を恥じる。

「僕が必ず、兄様を幸せにします」

「……ん？ よく聞こえなかった。もう一度言ってくれ」

小首を傾げ、ふわりと微笑む。

すると、ミゲルはどうしてか苦しげな表情を見せた。

ミゲルの目元をそっと撫でる。

「寝不足なんじゃないか？ 今日は早めに休もう」

私が先に寝なければ、ミゲルは休まないだろう。

それを見越して先に寝台に入った。

呆然とするミゲルだが、手招きをすれば、すぐに隣に寝転んだ。

結局、他愛もない話をしていたのだが、なぜかミゲルはうつ伏せの状態朝を迎えていた。

ミゲル side 兄様へ募る想い

「兄様が、僕を誘惑する……」

早朝に自室に戻った僕は、寝台に倒れ込んでいた。

病と闘う兄の負担にならないよう、己の気持ちを必死に抑えていた。

だが、月明かりに照らされ、寝台で手招きをする美しく愛おしい人を捉えた瞬間、心身共に鍛えていたはずの僕は、あっさりと誘惑に負けていた。

（おかげで、兄様の香りを一晚中堪能することができたけど……）

うつ伏せで寝る僕に、苦しくないか？ と心配しつつ、ちよっかいをかけてくるフラヴィオ。

トントんと、寝かしつけるように背を撫でてくれたのは嬉しかったが……

『寝たふりをしてもらっているぞ？ 耳が真っ赤だよ、ミゲル』と耳元で囁いてくるものだから、

たまつたもんじゃない。

必死に鍛えた今なら、すぐにも貴方を組み敷けるのだぞ！　と思いつながらも、僕は決してそんなことはしない。

同じ寝台にいて僕の筋肉に触れていたフラヴィオは、僕を弟としてしか見ていない。それでも僕は、出逢った当初からフラヴィオのことが大好きだった。

四年ほど前。

レオーネ伯爵邸に引越す際、父のフィリップが格好良く指示を出していた。

実は偉い人だったと知った瞬間でもあったが、手配されてきた使用人たちの殺意のこもった目に気付いた僕は、震え上がっていた。

自身が愛人の息子だと教えてくれた使用人たちは、決して僕を蔑ろにはしなかった。

でも、伯爵家の一員として認められていないことは、幼いながらも肌で感じ取っていた。

優しい両親がいるのに、住む場所が変わっただけで生きた心地がしなかった。

父に助けを求めたが、逆効果だった。

母も大袈裟に騒ぎ立て、使用人が解雇される結果になってしまう。

ふたりは僕を守ったつもりかもしれないが、僕はより追い詰められていた。

そんな時に、唯一、僕を気遣ってくれたのが、正妻の息子であるフラヴィオだ。

風邪をこじらせていた僕を介抱してくれ、ずっとそばにいてくれたのだ。

フラヴィオの母が亡くなったばかりだったため、きつと僕と母親の姿が重なったのだと思う。

それでも僕は、嬉しかった。

感謝と謝罪の言葉を口にすれば、フラヴィオは微笑みかけてくれた。

『なにか困ったことがあれば、言ってくれ。まあ、私が心配せずとも、ミゲルの両親がなんでもしてくれると思うが……』

頭を撫でられて喜んでいたが、その時のフラヴィオは、笑っているけど泣いているように見えた。誰しもがふたりが関わらないように目を光らせていたが、僕はフラヴィオの後をついて回った。

聡明なフラヴィオは、読み書きを教えてくれ、本も読んでくれる。

いつも偶然を装って会おうとしていたが、冷めた目を向けてきていた使用人たちが、フラヴィオの居場所を教えてくれるようになった。

心の中では僕を歓迎していなかった使用人たちに対して、両親のように叱咤するのではなく、フラヴィオは僕の良いところをたくさん話してくれていたのだ――

フラヴィオを血も涙もない男だと話していた母は、嘘つきだ。

妻子持ちだったことを隠していた父も、もちろん嘘つき。

尊敬していた両親に失望するまで、そう時間はかからなかった。

両親の目を盗み、フラヴィオとこっそりと会う時間だけが、僕の心を癒してくれていた。

だが、事件の日に全てが変わってしまった。

愚かな両親のせいで優しい兄と会えなくなり、心にぽっかりと穴が空いた。

母はフラヴィオと関わらないようにと必死だったが、そのおかげで僕はフラヴィオへの想いに気付くことになる。

会えない期間に、恋の炎は燃え上がっていたのだ。

目を伏せれば、かつて僕を守ってくれた時の凛々しいフラヴィオの姿が思い起こされる。肩に触れるくらいのキラキラの金色の髪。

宝石よりも綺麗な翡翠色の瞳。

人形のように整った顔立ちで、毅然とした態度。

弱気な僕とは、正反対の人物だった。

理想の男性像であり、本当に同じ父親の血が流れているのかと疑問に思っていた。

(その気持ちは、今も変わらないけど……)

現在の父は、元々美形ではなかったが、ぶくぶくと太って醜い容姿だ。

そのせいもあって、フラヴィオも醜男だと勘違いしている者が多い。

でも今のフラヴィオは、少し力を入れて抱きしめれば、壊れてしまいそうなほど儂げで、世界一美しい人だ。

それに、貴族女性が好みそうな中性的な容姿であることは間違いない。

同性から大層モテるだろう。

「ずっと、僕だけの兄様でいてほしい……。誰にも取られたくないっ」

フラヴィオが美しくなればなるほど、僕は焦りを覚えた。

僕の帰りを心待ちにしているフラヴィオは、とにかく可愛くて仕方がない。

自分だけに見せてくれる慈愛に満ちた微笑みに、僕は虜になっていた。

憎き愛人の息子を、無条件で可愛がってくれる心の広い人など、この世にフラヴィオくらいはいないだろう。

でも、ひとつだけ不満なことがある。

——メイドの存在だ。

僕が不在の間に、フラヴィオに触れることを許されていたふたり。

マリカとキャシーがフラヴィオを見る目は、僕と同じような感情を抱いている。

フラヴィオを邪魔な存在だと思っている母が選んだふたりは、平民だ。

次期レオーネ伯爵の伴侶にはなれないとわかっているふたりが、好意を伝えることはないだろう。だが、フラヴィオがどちらかを気に入ったなら、話は別だ。

(誰が相手でも耐えられない。想像しただけで、僕は狂ってしまいそうになる……)

マリカとキャシーには優しく接しているが、本当ならば今すぐにでも解雇したい。

なにせふたりは、フラヴィオの大切な宝石を盗んでいるのだ。

フラヴィオからは話を聞いていないが、部屋を見れば一目瞭然だった。

それに加えて、マリカとキャシーから、金を貸してほしいと相談されている。

その金の用途は、言わずともわかっていた。

「兄様の大切なものを盗んで換金しておいて、今更取り戻したいだなんて……。形見のブローチを

返したところで、ふたりは罪人だ」

懐にしまつてあるエメラルドのブローチを握りしめる。

フロラ夫人の形見のブローチは、すでに質屋から買い取つていた。

ふたりを許せない僕は、両親と出かける際には必ず同行させた。

素直でいい子たちだと、両親に何度も話した。

——僕がしたことはそれだけ。

そしてマリカとキャシーは、伯爵夫人付きのメイドになると決まつた。

僕が頼んだわけではない。

病に蝕まれていようとも、フラヴィオを警戒している母が、ふたりをこのまま放置するはずがなかった。

使用人の間では、フラヴィオの患う病は感染すると思われている。

今後は、むやみに触れる人は現れないだろう。

フラヴィオが心を開く相手は、絶対に兄を裏切らない僕だけでいい。

危険分子を排除し、安堵する僕は知らなかった。

窃盗犯だろうと、フラヴィオはふたりを友人だと思つていたことを——

そして、一度手に入れた穏やかな日々を奪われた時、フラヴィオが絶望してしまうことまでは、考えが及ばなかった。

あつという間に長期休暇が終わり、気を引き締めた僕は学園に戻る。

すぐさま友人たちに囲まれる僕は、笑みを見せながらも内心げんなりしていた。

「よお、ミゲル。野蠻人は元気だったか？」

「お前も可哀想だよな？ 兄貴が醜男つてだけで、婚約が決まらないだなんて」

「ホントホント！ せっかくミゲルは男前なのに」

フラヴィオのことをなにも知らないくせに、悪口を言つて僕に気に入られようとする下級貴族たちは、全員僕の取り巻きだった。

僕は熱心に授業を受け、勉強も剣術もどちらも手を抜かなかつた。

いずれ当主となるフラヴィオを支えるためだ。

母がなにを言おうと、当主になるつもりはこれっぽちもなかつた。

なにより、僕が学園で良い成績を収めれば、フラヴィオが喜んでくれる。

良き弟であり続けるためだけに、行きたくもない学園に通い、必死に学んでいた。

だがあまりできすぎると、両親だけでなく周囲の人間まで、僕が当主に相応しいと言ひ出した。

手を抜こうかとも考えたが、僕には負けられない相手がいた。

「お前ら、その顔で本気で言つてるのか？」

いつも僕たちに突つかかってくるのは、フラヴィオの同級生たちだ。

全員格上の相手。

僕の友人たちは口を噤むが、不貞腐れた顔を隠そうともしない。